

詩

島田照世・辰巳友佳子・水沢郁選

知事賞

スズメノカタビラ

佐藤 アイ(天津市)

きらめく雑音が世を覆う

会議室の窓から反射する光

声の渦

モニターに映る活字

その活字の一角一角が

時に点滅し拡大し

鋭利に突き刺さる

踊る色彩の洪水

ああ 溺れそうだ

抗えず

彼は飛び出す

私は後を追う

細身の背中

背広のほつれた糸が

くの字に苦痛を刻み

その影が揺れる

しゃがみこんだ足先の雑草に

物憂げに触れながら

胸に詰まった灰色の気泡の

その一粒一粒を解くように

彼は呟く

僕はこの雑草のようです

小さく震える丸まった背中に

くの字の影が深淵に広がる

僕のような者は

存在していないかのように
淘汰されていくのです

ああ 私も雑草のような者だ
光る世界で光らぬ者たちは

無言で見つめ合う

彼は小さな声で囁く

この雑草の名前はスズメノカタビラ
花言葉は

『わたしを踏まないで』

その花言葉に目が潤む

風に揺れる草の露のように

涙も時に震えていい

根は秘やかに深く地を掴む

黄緑色の華奢な葉をそっと離し

こちらを振り向き

微笑む

淡く小さく咲く花卉のように

詩

彼の背中の弛んだくの字に手を添え

会議室に導く

皆が待つてる そろそろ戻ろう

もう飛び出すなよと笑う

スズメノカタビラが

柔らかな風に揺れている

特選

中日新聞社賞

クラゲになろう

高井

豊（彦根市）

原始の海から

いま たどり着いたばかりというように
舟べりを ゆらりと漂っている

クラゲが あんなに軽く泳げるのは

余分なものは持たないからだ
まっすぐな背骨

見栄えがする血肉などなくなつて
ふんわりと ただ

生きたいところだけになつて
潮風に 遊んでいる

なにもかも忘れるには

意志をまとめる中枢神経などは

もつといらぬのか

どんな波をかぶつても
とりあえず

今日を乗り越えようと
生命いのちの営みのあり方を

透けて見せてくれている
（毒の刺し針など）

たやすく 明かさないで）

すぐに行きどまる わたしの
進化論の はずれの暗がり

外灯のように ともしている

特選

海鳥

原馬 正文（湖南省市）

目を開けると、俺は海辺に倒れていた。手足が動かない。海水が頬の下まで打ち寄せてくる。右手の肘から先が無い。傷口から赤い血の帯が、ゆらゆら揺れて波間に消えていく。全身が痙攣し、渚に小刻みな波紋を広げている。臨終の序章なのか、痛いという感覚がない。ここはどこだ？ 俺はここで何をしているのだ？ 遠くからボンボンと鈍い音がする。あれは爆撃音？ ここは南国の島？ ああ、俺は負傷兵なのだ！

霧の晴れ間から荒波が迫り来るように、あの戦鬪の地獄絵が甦ってきた。日本軍は水際作戦で敗北したのだ。上空から爆撃の嵐が襲ってきた。我が数十名の敗残兵が、叫びながら、あてもなく逃げた。閃光と爆音を浴びて、俺の五体は空中へ飛ばされた。入道雲と岸辺のヤシの原木がゆっくりに回るのが見えて、頭から激しく砂浜に叩きつけられたの

だ。生々しい惨劇が、次々脳裏に去来した。

現実世界のパズルが崩壊し、数多の記憶のピースが混在している。壊れた時系列がバラバラにフラッシュバックしている。爆死や餓死した兵士たちの顔が交互に浮かんでくる。H兵長、T上等兵、W二等兵、H一等兵……。ああ、今すぐ日本の故郷へ、あの家へ帰れたらと、切ない思いが込み上げてきた。生死の波打ち際を逍遙しながら、また意識が遠のいた。

気が付くと、俺は白い鳥だった。見覚えのある農村の空をゆっくり旋回していた。なぜ今、空を飛んでいるのか？ と考えかけて、あっそうだ、俺はずっと昔から鳥であったと納得した。翼の下には、稲穂の波が広がっている。坊主頭の少年が、母親と並んで稲刈りをしている。その少年が腰を伸ばしながらこちらを見た。彼と目が合ったとき、もう一人の俺がそこにいるのだと感じた。あの少年が本当の俺なら、今、空を飛んでいるのは、一体誰なのだろう？ と考えたとき、白い靄に包まれた。

雲を抜けると、眼下に海が現れた。白い珊瑚礁が散在し、俺は空を舞っている。渚には俺の亡骸が横たわり、潮に引

かれながら青い海に吸い込まれていく。

闘うことも逃げることも、生きることも死ぬことも、もう
どうでもいい。お国の為に敵兵を射殺したことも、お国の
せいで俺が戦死することも、魂が破裂するほどの苦痛なの
に、それらが、今はちっぽけなことと思えてくる。人間同
士の殺戮は、小蟹が魚に飲まれることと、魚が鳥に喰われ
ることと、大した違いはないのだ。

海は泰然と俺の抜け殻を呑み込んでいく。

俺の命はゆっくり南国の空に溶解していく。

空は何事もなく、青く深く澄んでいく。

特選

群れを綴る

叶

葉湖（東近江市）

空と海を縫い合わせた黒い糸
波縫いは水面すれすれを
等間隔に一列に並び

パラパラ漫画のコマ送りのように
微細に羽ばたいている

デッキに駆け上がり
目を凝らして見ると

数千羽もの渡り鳥が
船に並走している

姉と私は圧巻の光景に
胸を躍らせてはしゃいだ

遙か遠くの岸辺から
延々と続く黒い隊列は

じつくりと私たちの船を追い越し
地平線の裏側へと消えていった

糸が抜けた青と青を眺め続けた

一羽また一羽と

色とりどりの紙で鶴を折り

鶴と鶴を絹糸で綴じていく

一束五十羽の群れを二十束

千羽の群れを花束のように綴った

あの年の暮れ

棺布団の上に組まれた母の手に

姉と綴った千羽鶴をそつとのせた

火葬炉から焼き上がった

白い骨になった母と

絞り帯のように縮み

灰になった鶴の群れ

それまで気丈に振舞っていた姉が

絶滅寸前の狼となり

天を仰いで啼き崩れた

静まり返った収骨室に

遠吠えだけが響いていた

オオーン　オオーン　アオーン

オオーン　オオーン　アオーン

みんなどこへ旅立つの

特選

草種

田中義宏（米原市）

ドツカと座った
大きく息を吐いて座った
鎌を横に置いて
額の汗を拭いたら、痛っ
オッ これは草種
十、二十ではない
腕カバーの外側に
秩序なくへばりついている
手で払っても
落ちるものではない
手袋を脱いで
指先で摘まむ
一つずつ摘まむ
力を入れて摘まむ

右腕にもあると摘まむ

手を止めて じっと見る
本体は幅二ミリ、長さ五ミリ程
それを堅い毛が守っている
釣針のような返しも付いている
払っても取れないはずだ
隙間なく全身を守っている
毛が防護壁になって身体を倍にしている
迷惑な雑草として嫌われる
同じ草の仲間なのに
アサガオやパンジーのように
鉢に植えられることもなく
菊のように品評会で鑑賞されることもなく
草刈り機で一瞬に切られ、薙ぎ払われた
空地の隅でお日様を求めて
懸命に伸びていたのに
この種に花の時があった
名を知られていない花だったが

色の美しさを競い合っていた
姿の美しさを主張していた
虫を誘い、精一杯輝いていた
種になるために輝いていた

草種が足元に散らばっている
飛び散ることなく散らばっている
前の空地までには距離がある
一粒残せば子孫に繋がる
草種の子孫を残すか
掃き集めて 踏み潰すべきか

特選

陽炎

足立紀子（天津市）

低い石積みが続く古道で
太い樹の根元に
細い足をひっかける空蟬
背の割れ目が、深く
地球の裏側まで突き通すほどに鋭い

私の心にも傷はあるけれど
足裏の裂ける様な痛みを知ること無く
こうして歩んで来られた
しあわせに気付く

地から生まれて涯も無く
一すじに続いていく
重々しい足音
熱砂と真空

轟音と寂滅

閃光と奈落

さまよう魂は、新月の闇に

かえるべき宿を見失う

止まらない

人間たちの負の動力源は

一握りの山脈より大洋より

強い者たちの掲げる道理なのだろうか

空蟬の暗い裂け目から

眼を離した足許に、微風で晒される

蜻蛉のちぎれた一枚羽

日の照りつける前方を往く人影は

いつのまにかもう消えてしまっている